

## 26. 《明応の大地震から始まる社会大変革》

1492年、コロンブスが、アメリカ大陸に到達します。その6年後、1498年（明応7）、大地震が発生。東海・東南海・南海地震の3連発地震でした。大津波が発生し、死者は、9万人に達したともいわれています。鎌倉の大仏殿が倒壊焼失し、浜名湖が海と繋がり、三重の安濃津が海没しました。

関東地域は、太田道灌亡き後、上杉家の中での主導権争いが起こっていました。そこに、北条早雲（注1）が登場してきます。この地震を契機に、伊豆を完全征服し、次に相模国を平定します。早雲は、独自に検地を断行し領国内の法律も決めました。検地は、津波により土地境界が不明確となったから断行できたのでしょう。

こうした早雲の領国経営は、守護大名とは違う新しい支配者像（戦国大名）を作り出しました。津波による既存秩序崩壊が戦国大名を誕生させたわけです。

早雲が死して四半世紀後、織田信長が誕生します。信長の出生地の東海地方は、地球寒冷化に拠る海面低下が幸いし、輪中築造によって耕作地が増え、第1次産業も拡大していたと思われます。そして鉄砲が日本に伝わり、東海地方（美濃）出身の鍛冶屋によりすぐに国産化（注2）されます。また美濃には、油商人の斎藤道三（注3）、つまり第2次産業の企業家が、戦国大名になっていました。

そして信長は、道三の娘と結婚。信長は、企業家一族をパートナーとし、やがてその一族を呑みこみ、政治家兼企業家として「楽市楽座」という流通と市場の自由化（座・関所・既成市場の廃止）を断行するのです。（注4）

第1次産業だけに依存しない経済基盤を構築した信長は、常備軍を持つまでになり、天下統一を目指します。志半ばで本能寺の変に倒れますが、その跡を継いだ豊臣秀吉は、信長のノウハウを習熟し、さらに実務派の実力者でした。その秀吉が、いよいよ関東平定にやってきます。

参考：主要年表

1519 年：北条早雲死

1534 年：織田信長誕生

1543 年：鉄砲伝来

注 1：北条早雲（生没年：1456?－1519 年）は、卑しい身分からの成り上がり者（下剋上（げこくじょう））とされていましたが、現在は家格の高い高級武士だったとされています。早雲から始まる家系は後北条氏と呼ばれます。

注 2：轍鮒伝来の 2 年後、1545 年、美濃生まれの矢板金兵衛（生没年：1502－1570 年）が国産鉄砲の製造に成功。

注 3：斎藤道三（生没年：1494?－1556 年）は、商人から戦国大名になった、まさに下剋上の大名です。

注 4：油商人の「座」であった大山崎油座も解散させられています。ただし、豊臣秀吉のときに復活していますが、往時の勢いを取り戻すまでには至りませんでした。

写真は、①明応地震の津波分布図（JWNのHPより 2011 年 4 月 7 日中日新聞）、②JR 小田原駅前の北条早雲像（Nikon OnlineGalleryHPより ricky\_brass 所有、③清洲城にある織田信長像（フォト蔵HPより kyu3 所有）

①



※数字は津波の高さ(m)。故飯田汲事名誉教授の調査をもとに作成

②



③

